

卒業文集最後の二行

いちのへ
一戸 冬彦

「思い出となれば、みな懐かしく美しい」と俗に言われるが、それは過去を美化しているか、時間の経過とともに風化してくれるのをよいことに、つらい体験や苦い思い出を忘れようと「努力」しているに過ぎまい、と私は勝手に解釈している。

生来、気位が高く、不遜極まりない性格の私だが、こんな私でもこの場を借りてざんげしたい、いや、せずにはいられない出来事がある。深い深い後悔。取り返しのつかない心の傷だ。

時は、小学校時代に遡る。

同級生にT子さんという女の子がいた。彼女は早くしてお母さんを亡くし、二人の弟さんの面倒もみなければならなかった。お父さんは魚の行商である。

つまり、Tさんは母親代わりといってよい。しかも、お父さんの仕事があまりかんばしくないようで、経済的にも恵まれず、その頃の時代にしても彼女の服装はみすばらしいというより、正直言って汚かった。

今にして思えば、経済面からそうであろうが、母親代わりという生活環境から、自分の身の回りを構っているどころではなかったのであらう。

そのTさんが、六年生のとき私の隣の席になった。加えて、運の悪いことに彼女よりちょっとばかり成績も良く（もつともTさんも上位の成績だった）、金銭的にも幾分恵まれた生徒たちが彼女の席を取り囲む形になった。

生意気で口の悪い私は、先頭に立ってTさんをけなした。

「きたねえから、もっと離れろ。」

この私の言葉に悪童たちは、更にはやし立てた。

「臭いから、誰もT子に近付くなじゃ。」

「毎日風呂さ入って頭を洗って来いよ。」

こうした嫌がらせにも、T子さんは泣きもせずじっと堪えた。ほおを紅潮させながらも歯を食いしばって、涙を見せもしなかった。泣いたり涙を見せたりすると、我々にもっとばかにされ、いじめられると思ったのであろう。



しかも、T子さんは、担任に一度もそのことを言わなかった。担任のM先生は校内でも屈指の怖い先生なのである。M先生に告げれば我々はこっぴどく叱られ、自分も一層惨めになると考えたのではないか。卑怯な我々は、T子さんが担任に言わないのを知って、更に輪をかけて口汚く罵り続けた。

そんなある日、クラスで漢字の小テストが行われた。

問題用紙に、どうしても書けない漢字が、私に二個あった。困った私が隣のT子さんの答案用紙をチラリと盗み見ると、彼女はちゃんと書いていた。しかも、正答である。それとばかりに、私はカンニングをした。

後日、答案返却があり、その際にM先生が私を褒めてくれた。

「イチノへ、よく頑張ったな。満点はお前一人だけだぞ。」

私は後ろめたさを少し感じただけで満足だった。何しろ、満点は私だけなのだから。

だが、その後に渡されたT子さんの答案用紙を見て、私はがく然を通り越して目の前が真っ白になり、同時に真っ暗になった。なんと、T子さんは一個だけの間違いで、九十八点なのだ。私がカンニングをしなければ、T子さんは満点ではないが、最高得点者ということになる。

私は弱者であった。勇気がなかった。卑劣な人間だった。T子さんは私がカンニングしたことを知らないようである。それどころか、T子さんは皮肉などカケラもなく、

「さすがイチノへさんね。おめでとう。」

微笑をもって心から言ってくれたのだ。それに対して私は、

「問題が易しかったからな。」

と、臆するところもなく当然のように応えた。

さらに、そんなT子さんに、もっとひどい追い打ちが待っていた。授業の後、T子さんの答案用紙を例の悪童どもが見て、

「イチノへの答えを見で書いたんだろう。」

「お前が九十八点も取れるわけがねえよ。」

「カンニングしてまで、いい点数を取りたかったのか？」

と、口を極めて彼女に中傷の矢を浴びせた。さすがの私も、このときはこの中傷に加われなかった。

ところが、連中があまり騒ぎ立て、T子さんを責めているのを聞いているうちに、私の心の中の後ろめたさが消え、逆に連中の尻馬に乗る発言をしてしまった。

「やっぱり、おめえは私の答えを見だんだろう。見だに決まってる。ずるいと思わねえのか。」
人の言葉に同調して、軽はずみなことをすること
すると、T子さんは泣き声で、

「私はイチノへさんの答えは見ではありません。着てる物や髪はきたねえかもしれないけど、心はきたなぐねえです。」

と、机に顔を伏せた後、

「私をどこまでいじめれば、皆さんは気が済むの！」

叫びながら石炭小屋のある方へ走って行った。T子さんの初めての泣いたり叫んだり、その場から逃げ出したりと言動に、悪童どもは言葉を失った。私は彼女の後を追いつけて、土下座して謝りたい衝動に駆られたが、その度胸も勇氣も瞬時にして吹っ飛び、それどころか連中を前に、

「ほんとのことと言われたんで、あれほど怒ったんだ。私の答えを見で、めぐせえ(恥ずかしい)と思わねえのかな。」

と、胸を反らせた。

石炭小屋から戻って来たT子さんは、涙こそ拭い収められていたが、目をうさぎのように充血させ、まぶたを厚く腫れさせていた。

……やがて、卒業式を迎えることになった。

私はとうとうT子さんに謝らずじまいで終わった。

だが、式の日に配られた「卒業文集」をその日の夜に家で読み、私は枕をぬれにぬらしてしまった。T子さんの作文の、特に最後の二行が私の涙腺を果てもなく緩めたのだ。

『……私が今一番欲しいのは母でもなく、本当のお友達です。そして、きれいな洋服です。』

この二行に、T子さんの思いの全てが込められている――。

その理由は、改めて書くまでもないし、書く必要もあるまい。

あまりに切なく、つらく、悲しすぎる……。

それにしても、私は随分とT子さんにひどい仕打ちをし続けたものだ。謝罪しても謝罪し尽くせるものではない。許しを乞

うても許されるものではない。三十年余りが過ぎた今でも、T子さんへの罪業を思い出すたびに忍び泣いてしまう私である。

あの「卒業文集」の最後の二行は、大きな衝撃だった。大いなる悔いを与えてくれた。あの二行を読まなかったら、現在の私はどうなっていたであろう。

